

中村知至『古今和歌集遠鏡補正』翻字と解題

石川，裕子
九州大学大学院博士後期課程

金，英燦
九州大学大学院博士後期課程

徐，迎春
九州大学大学院博士後期課程

森，誠子
九州大学大学院博士後期課程

他

<https://doi.org/10.15017/15085>

出版情報：文献探究. 46, pp.100-128, 2008-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



中村知至『古今和歌集遠鏡補正』翻字と解題

石川 裕子・金 英燦・徐 迎春・森 誠子・
日高 愛子・下中 敦子・藤崎 祐二・吉田 紗弥香

一 解題

『古今和歌集遠鏡補正』（以下、『補正』）は、その書名に見る通り、本居宣長著『古今和歌集遠鏡』（以下、『遠鏡』）の中から、五十五首を問題として取り上げ、「補正」を加えたものである。

巻頭には、天保甲辰二月の序文のほか、橘守部（天明元年—嘉永二年）による天保十四（一八四三）年五月の序文、吉田令世（寛政三年—弘化元年）による天保十四年七月の序文、そして、白井固（明和八年—天保四年）による「かゝみのちり」と題する序文が付される。

これら序者と著者中村知至（生没年不詳）との関係、および刊行に至る経緯や書誌等の詳細は、山本淳氏「中村知至著『古今和歌集遠鏡補正』の訳文について」（『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究報告』三三三号、平成十八年三月）に詳しい。

なお、従来、『補正』の刊行は天保十四年とされてきたが、序年の「天保甲辰二月」は、天保十五年、すなわち天保から弘化元（一八四

四）年へと元号が改められたちようど節目にあたり、したがって、『補正』の刊行は弘化元年とみるべきであろう。

知至は、この守部、令世、固の三者の他に、守部の序文や凡例に書かれるように、足代弘訓（天明四年—安政三年）^{（注1）}からも意見を多分に採取したものと想像される。しかし、『補正』において弘訓の意見が具体的に明記されるのは二三〇番歌頭注のみであり、その実態を窺い知ることはできない。

他方、知至の「先師」である固の説や意見は、『補正』で取り上げる五十五首中二十三首に言及がなされ、これらは全て本文中に配されている。最も多く記述されるのは守部の意見で、五十五首中二十九首に見られるが、多くは知至や固の説に対する批評にとどまり、全て頭注に配されている。

このように、『補正』では、「先師」である固の説や批評を歌注の本文に配し、それと区別して、その他諸々の意見や批評は頭注に配しているのであるが、この頭注には、先述した守部や令世、弘訓の他に、

天野政徳^(注2)(天明四年―文久元年)なる人物の名も見られる。九六三番歌注において、「知至私かに云、さきに天野政徳の御もとに此ことを申いたりしかは、こたへらるゝに…」という記述があることから、知至が政徳にも教えを乞うていたことが窺い知れる。

加えて、序注および二六番歌注に、「清水の光房^(注3)の御物かたりの序に」として、清水光房(生年未詳―慶応元年)の意見が引かれることにも注目すべきであろう。

なお、巻末には「漢籍仏説にわたれる歌」が付されるが、これらの漢籍の多くは『余材抄』など先行する注釈書において既に指摘されるところである。

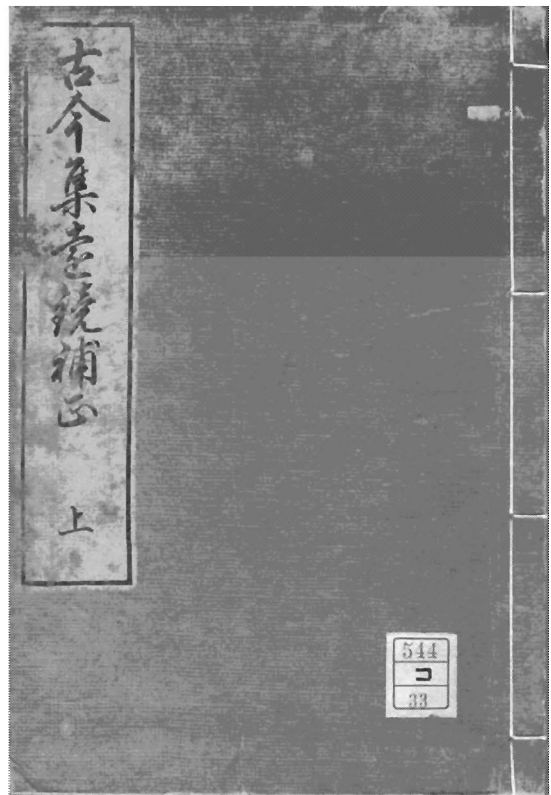
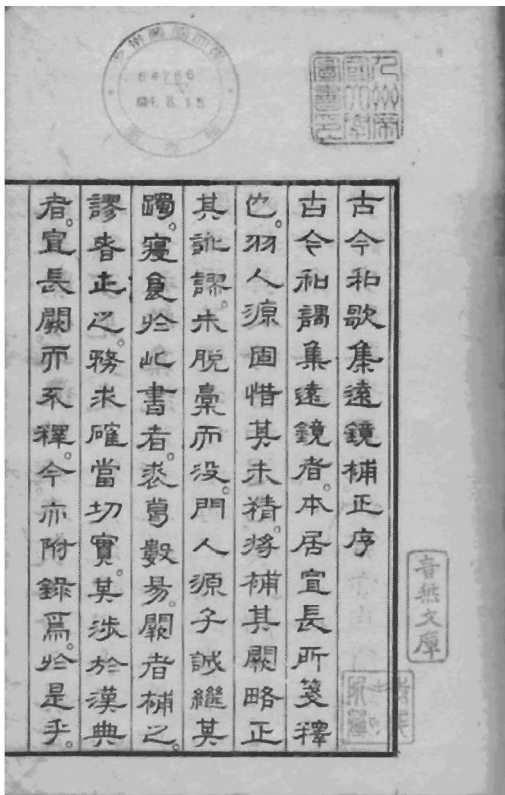
注

(注1)『国書人名辞典』に依ると、足代弘訓は、享和元(一八〇一年)荒木田久老に入門し、ついで、芝山持豊に和歌、本居大平に国学、本居春庭に国語を学び、本居学派の中心的存在となった。なお、知至の師白井固は、弘訓に師事して和歌を学んだ。

(注2)『国書人名辞典』に依ると、橘千蔭の門人である大石千引に和歌を学んだ。

(注3)『国書人名辞典』に依ると、清水浜臣に学んで国学に通じ、浜臣の晩年に養嗣子となり、浜臣の後継者として活躍、浜臣判の歌合に参加した。

(日高・下中)



二 翻字

〈凡例〉

- 一、翻字には、九州大学附属中央図書館無文庫蔵本を用いた。
- 一、序注には[序]と付し、歌注には算用数字で歌番号を付した。
- 一、頭注は、対象となる序注または歌注の後に【】内で示した。
- 一、旧漢字・異体字を新漢字に改めた。
- 一、便宜上、句読点・「」等を補った。但し、序文における句読点、及び、巻末の「漢籍仏説にわたれる歌」における訓点は、原本にそのまま依り、『古今和歌集遠鏡』の引用部分については、『古今和歌集遠鏡』版本の句読点に依った。
- 一、引用歌は「」で括り、後に（）で歌集名と新編国歌大観に依る歌番号を付した。ただし、万葉集の歌番号は旧編国歌大観に依った。
- 一、刷りが悪く判読不能な箇所については、一字ずつ■（判読不能）として示した。また、誤植については、その右脇に（ママ）と記した。
- 一、丁の変わり目には、「」を付した後、「」内に丁数を示した。

（目高）

古今和歌集遠鏡補正序

古今和歌集遠鏡者。本居宣長所箋釈也。羽人源固惜其未精。将補其闕略正其訛謬。未脱稿而没。門人源子誠繼其躅。寢食於此書者。裘葛數易。闕者補之。謬者正之。務求確当切実。其涉於漢典者。宣長闕而不釈。今亦附録焉。於是乎。通塞導滯。不遺余蘊。庶幾作者之真旨燦然可見矣。豈不後学之津梁乎。名曰古今和歌集遠鏡補正。抑子誠以善和歌称。而其学之博洽。世之讀此書者。亦必知其不特善和歌也。頃者。諸友慇懃授梓。余於子誠。締交日久。能無一言乎。而詩与和歌各異途。弁言亦自有其人。余非其人也。何敢序之。然嘗窃謂。詩之与和歌。不過本於性情而已。載之文辞。於我為和歌。於彼為詩賦。故其体製雖有彼我之別。至其本於性情。固無兩途矣。固無兩途。即余之顛斯編。亦焉謂非其人乎哉。

天保甲辰二月上澣

北総 桂園秋場祐撰并書

桂園	曳尾
塗中	

もちの夜の月も、むら雲かゝりては、さやかならす、ますみの鏡も、ちりひちゐては、あきらか、ならす、古鈴屋老翁のみかき出られたる、遠鏡なりて、千とせのむかしの、遠き世の歌の意も、中空の雲をはらひて、隈なき月を望むかことなり来しは、偏に老翁かいさになむ、しかはあれと、後よりみれば、猶その鏡にも、のこる塵ひちなきにあ

らしと、ゆふ月夜、出羽国の庄内県、春雲の、白井源固カシの翁、その塵をいさゝかきよめて、すなはち鏡の塵と、名つけたる一卷を、をしへ子、天地の、中村知至にあたへられぬ、知至ぬし、其心さしを嗣で、猶遣れる塵を掃ひそへて、二巻となしたるをは、今は甘とせあまりのむかし、足代弘訓ぬしに、訂さしめて、一たひ定りぬ、その後又、かの遠鏡に引漏せりし、故事によれる歌のかきり、其出る所の書ともを、詳に引そへたるをは、わか里へも齎来て、守部にもよみ聞せられき、そをこたひ、書屋か乞けるまに／＼、ゆるし与へられぬとなり、かゝれは、今はをさ／＼残るちりもあらずして、更にみかける、ますみかゝみにむかふかことく、はれし夜の月に望むかこと、なりぬらむかし、

天保十四年五月

東都 池宝

橘守部

ひさ方の月はかりあやしきものはあらし、おのも／＼見る人から、そのおほさおなしからすといへるを、此哥も亦其ことくになむ有へき、これの古今和歌集の遠鏡のゝこれるをおきなふといふふみも、亦その如くに見る人からの心／＼なるへきにこそあらめ、知至のぬしか、心もちひのおろそかならぬ事は、おのも／＼人そのまなこに見しりわくへきわさになむ

天保十四年といふとしの文月十日はかり

水戸の

吉田令世

かゝみのちり

本居大人の古今集遠鏡を見るに、けにちかくうつされて、はたくちふりなと心せられたる、いとめてたく、初学のとく心えやすまおほゆるものからあなうかとのと都ことはにみにならぬ、けにはとみに聞とりかてなるふしく／＼なきにしもあらねは、見るま／＼にかいしるして、猶ものしれらん人にとはんとて也、さるは「まかのひれ」とかのまか／＼しき心ならて、哥学のためにこの鏡をいよくあきらかにみまほしくてなんことさらにちり打かくる遠鏡はらひて見せん人をこそまで

源固識

凡例

○雅言を俗語にうつせるは、大かた遠鏡によるといへとも、たま／＼相照らして詞をうつさゝるもあるは、意を解くを専らにして、うつし詞は本書にゆつればなり、

○俗語仮字とてにをはとにかゝはらさるも、亦遠鏡によるなり、

○遠鏡のことは、始に○くし、終に「せり、

○文中漢語を用る所あるは、文の工拙にかゝはら凡例二す、今人の耳にちか／＼らんことを思ふか故なり、

○古今集のことは、用あれは出し、用なきは出さず、題と姓名とも亦しかり、

○先師源固の世にありし時、伊勢の足代弘訓に見せられて、朱点ありしものは、今も亦章のはしめに点せり、後にわれ考ふる所の章は点なきなり、

○遠鏡のことはに漢籍仏説の故事を訳せさるか故に故事をさせる詞の用なく見ゆれば、今別に「凡例二」を抄し出す、されと今われこの田間

にのかれて書乏しく、たゞ暗記により来る所のみをあく、猶後に委しくものすへし、

○故事をふめるうた、集中前なるものをあけて、類ありとも、後なるものはあけず、なすらへてしるへし、

○つきていふ歌は、たゞつゞけからのいうに、うるはしくしらへたけ高くして、詞いやしからさるかうへに、よく人の情にひく所あるをよしと【凡例三〇】とすれば、訳も亦其詞いやしからさるをよしとす、しかるをいはんや、俗語もて雅言をうつすことはあるへからさるわさにこそありけれ、しかれは此遠鏡もまた宣長の心にあらさることしるへし、この俗語といふものは十とせはたとせにうつり、ひな都にかはり、国々にことなり、高きいやしきに所かはれは、百年の後にはやうやくしり得かたき事いて来て、後々の世にはつきく【凡例三二】に古言を考ふるの害なるふしもいて来へくなん、【凡例三二】さはあれと、今の世のうたよむかきり、此道にいりそむる人々、遠鏡といふ文もたさるはなく読まさるもなければ、此文も今は二十余年のむかし、師なる源のかたしの世にありし時、たはふれのやうにかきつゝり、鏡の塵と名つけて与へられけるを、後にいさゝか我もかきつきて、みたりかはしくものせるわさなれと、今はた友のもとにやりて、たゞわかおもふところのよしあしを聞んとてなり、かへすくみんひとのた【凡例三三】めにと後の世長く伝ふへきわさにあらずなん、

○大凡詩歌は注しかたく訳しかたきものなりけらし、むかしより唐大和の注さくといふものゝ全く宜しきを得たりと聞ゆるなんなりける、うへなるかな、そのいて来るはしめをおもへは、かたしともかたきわさにこそありけれ、そもくひとの世にふる、よろこひ、かなしひ、うれひ、たのしひ、時々折にふれ、ことく【凡例三四】の

ふしにあふことに、心内に感して、詞外にあらはれ、あなあはれ、あなたのしとなかめうたひ、猶たらずして、手を廻はし、あしをふみおとらするの時は、おのれをわするゝものならし、この時の詞そ、たまく自然の妙あるものありける、また其詞を学ひつくれるものありけり、されは詩歌は自然の詞あり、つくれることはあり、其自然なるものを妙といひ、つくれるものを工といふ、たくみは学ひよりなりて、自然は感情の余りになるなり、此感するの情ありといへとも、学ひ【凡例三五】いまたしき輩は一句の妙ありても一首全からず、学ひありて工めるものは一首全くして一句の妙を得るもの少し、才と学と二ツなから得たらん人の、其時にのそみ、折にふれていたく物に感するの余りにうたひいつる詞のおのつから妙となれるものは天地もうこき鬼神もおそろゝ所也、しかれは自然は学ひにしかず、学ひはしせんを学ふものなり、古へをしたひ、自然を学ふことに心をつくし、思ひをこらし、とし月をつもらは、【凡例三六】高き山も越え、遠き道もいたるかことく、其ひとく【凡例三七】のほとく【凡例三八】にいたる所なからんやは、おのつから古へにちかき人とはなりぬへし、古へにちかき心をもて春秋の海山にむかはゝ、峯の花のかすめるあした、浦の月のさやけきゆふへ、いつれか古にあらすとせん、さる時は古の作者、今の注者いつれかまさり、いつれかおとるへけん、しかれは作者の述し所、注者の心に悟らさるはあらさるへし、かゝる人を得たらん世は、其人をしてこそ【凡例三九】詩歌の注訳はなさしめ、古き作者のこゝろをも顕すへきものなれ、しかはあれとも詩歌の注訳は三ツのかたきことありけり、其一ツには自然の妙句は詞をかふれば調格語勢あらたまるか故に、いかに心して筆はとるとも、其言魂は顕すことかたく、いはゝちる花のひるかへるを画きては、風の香は

しきを思はせ、松風を語らんとしては、波の声にたとふるかことし、其二ツには作者は古にあり、其時にのそみ、其折にふれて、感情むねに余り詞外【凡例五】にあらはれしを、注者は今の世に居り、平らかに座して、遠く其ときを案するの情、おのつから厚からさることしるへし、たとへは宮門の外にたゝすみて舞樂をきゝ、罪なくして配所の月を見るかことし、其三ツには今の注者のわさ、いにしへの作者におとらさるはまれなるへし、わさのおとらん注者は、たとへはわれ右の眼をすかめせしに、鏡の影は左の眼をすかめすれとも、あひむかひておのれに【凡例六】あへりとし、秋の山を見るに村雨の雲にあへるかことし、この三つのものはそのことのかたかれや、詩歌は注訳の宜しきものゝなかるらし、むかしよりかくありけるを、今はたわか案の注しかたく訳しかたしといふ、うへなるにあらすや、天保十四年といふとしの、みつのとの卵のきささき十日はかりに、出羽国人源のともなり、下つふさの国とよたの郡、毛奴川のほとりなる田つらの庵にかきつゝりぬ、

【令世云、是此新文高標深妙非浅字所能髣髴歎不已、】

【橘守部云、こゝに毛奴川といへるそよろしき、今はきぬ川とよふなれと、水

源毛奴の国よりいづれは、毛奴川也といへる、知至かことしかり、】【凡例六】

古今和歌集遠鏡補正卷上

〔序〕人まろなくなりたれとうたの事とゝまれるかな

知至ひそかにいふ、とゝまれるは当時勅を蒙りてなれる所の此集をさす、此二句前句のよろこひぬるといへるをつなぎ来り第一段

よりの大略をむすひ次の意を引起す、次の一段は其意たゝ此二句の意を細かにときてあきらかにしらしむるなり、此序のむすひこの二句にあることを「正」しるへし

〔序〕たとひ時うつりことさきたのしひかなしひゆきかふとも此歌の

宣長云群也もしあるをやあをやきの糸たえす松の葉のちりうせすしてまさきのかつら長くつたはり鳥のあと久しくとゝまれらは

○此集力若世間二青柳の糸松の葉のタエセスニ正木のかつら

末長ウ鳥の跡久シウ伝ヘテサヘアツタナラハ

あるをやの四字は、次のあをやきよりまきたる誤「正」なるへし、もしは若にて、久しくとゝまれらはといふへかゝれる詞なり

〔序〕哥のさまをもしりことの心を得たらん人は大空の月を見るかことく
に古を仰きて今を恋さらめかも

○此集ヲサテく結構ナ集チヤト云テ 天十月ヲ見ルコトクニ仰キタツト云テ 今此御当代ヲシタハヌト云コトハアルマイハサテ千秋云、いにしへとは、後世よりいふ古にて、則此延喜の御代をさせり「正」

知至私かに云、宣長の「もし」の二字は「若」の字に見られ、「あるをや」の四字はけつられたるは、さることもあるへけれど、われまたおもふに、むかしの文古き書などは今さらに改るもけつるも吝ものしけなる心持のみせられて、けにさなんともなしかたければ、いさゝかいはん、「もし」とあるを文字と読ときは字音故に唐めいたりなとにて、「若」の意にとかれたればこそ、次の「あるをや」の四字はけつるへきことゝはなりにけらし、されと貫之の此序かゝれたるは古き「正」わか国ふりにはあらで、句のつ

ゝきことはの巧なる大かた漢さまに法とられしと見ゆるかうへに、此序の中にも神代にはうたのもしもきたまらず、又三十もしあまりひともしは読けるなど、字音なからにいへる事ともなれば、今こゝも「文字」とも見るべく、

此事さきに清水の光房の物かたりの序に、此「もし」は「文字」なるべく、「もし」といへることは、源語にも「別れといふもし」又は「今はこのもしませ給へ」などいへりと申されき、今、われ、またおもふに、此集^{三三三}中、なりひらの朝臣の「かきつは

たといふ五もしを句のかしらに」云々などいへり、

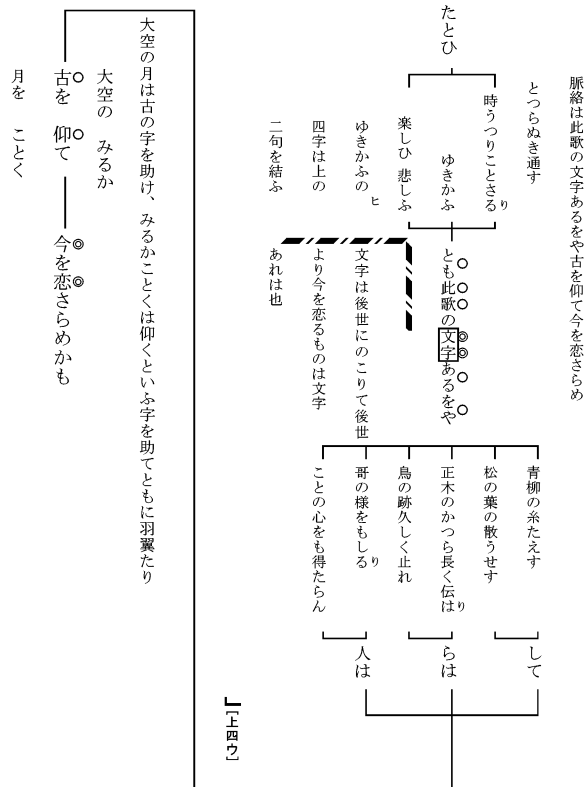
又「あるをや」といへるにて、いよく上の「もし」は「文字」なるべくおほゆ、いかにといふに上古のことく歌ありとも文字なくはつたふへきわさなかるを、かく万の事おとし給ふ御代となりて、今は「此哥の文字あるをや」と以下の句を引起して、後世に今を恋すあらんかもと結ひとめたるにあらすや、しかれば「もし」は「文字」にて「あるをや」はけつるへからさ^{三三三}るになん、猶、次に細かにいはん、是はかの漢文にいへる所の双関法によられてかゝれたる也、初学のためにかりに図してみんには

【真■（判読不能）いふ、師の双関法と文法を立ていはれしはかりに名つけたるにて此古の時にかゝる名のあるにはあらすなん、】

【序】たとひときうつりことさ^{青柳のいとたえす}り
たのしひかなしひ行かふとも此うたのもしあるをや
松の葉のちりうせす
まさきのから長く伝^{鳥の跡久しくとまれ}は
うたの心をも得たらん
きて今を恋さらめかも

訳にも千秋かことにも「古を仰きて」の「古」は延喜の御世をさせりといへるはたかへり、こゝに「古」といふは則延喜^{上四〇}の世に居りての「古」にて、ならの朝などをさす也、
上段にならの朝のこと
をいひ、又、万葉など

のこをいへる句を
受てむすへる也、
「今を」といふは延喜五年に当り、「恋さらめ」といふは後世をさせり、三つの詞相むかへて文をなせる也、又、童蒙のために此文の脈絡貫通の筆路を図してみする時は、



「たとひ」といふより数系の中一系により読下して大意通る也、
「たとひ時うつり事さるとも此歌の文字あるをや、歌の様をもし
るひとは古を仰て今を恋すはあらん」と読かことし、如斯なるか
故に「文字」の二字中央にありて、上の「たとひ」以下の句を受
収め、又「あるをや」の四字にて「文字」の二字より下の数句を
うみ^{上五〇}出して、前後をなすの働を味へ知るへし、此序の訳

前段にもいさゝかいかゝとおもふしなきにしもあらねと、後にものすへく今は事しけきにまきれてさておきぬ、○宣長は「もし」といふは「らは」にかゝりてといへとも、此集の、若久しくとゝまればと疑ふは、

当今の勅を蒙りて撰し天覧に備ふる時の詞にあらず、宣長は仕官職掌せされは其義をしらす、臣たるの身いかてさる事あらん、いかにも祝し奉りて、今は此歌の文字あるをや絶すうせす長く伝ひ、久し「まじ」くとゝまりて後世の人は日月を仰くかことくに

当今の朝を恋さらめかも、といはんこそ朝廷に立人の常のことならめ、しかれば「らは」といふは軽くみへきなり、まことに此ぬしの言のことく、今の世に至るまで此集をおもふこと実にしかり、

【令世云、千載の今に致て紀氏の文脈はしめて明らか也、知至かこと実に然り、】

春立ける日よめる

2、袖ひちてむすひし水の氷れるを春たつけふの風やとくらむ

○袖ヲヌラシテスクウタ水ノ氷テアルノヲ春ノ来タ今日ノ風力吹テトカステアラウカ」「上六」

知至ひそかにいふ、訳のことはけにちかくうつされたるものから、もとより初学の心あさからんものにもせられたらめは、猶ときたらぬこゝちにこそ、袖ヲヌラシテスクウタ水とはかりにては、初学の心にむかし人のいかなることのならばしにか、さるわさはなせしなとゝおもひて、作者の心を汲とりかてなるもありぬへし、このうたの、夏すき秋さりたるもいつしかに、冬さへ暮て春立来り、ひとゝせのとく過しおもひを細にしらしむへきには、「上六」去年ノ六七ノ頃ニハ涼ミナカラノ手ナクサミニ袖ヲモヌラシテ

スクヒナントセシ水ノ冬ニ成テハ氷ツテアルノヲ最早春ノ来タ今日ノ風力吹テ解ステアラウカサテモく年ノ過キ来ルノハ造作モナイモノチヤマア

8、二条の後の春宮のみやすむ所と聞えける時に正月三日おまへにめしておほせことありけるあいたに日はてりながら雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ひける

春の日の光にあたる我なれとかしらの雪となるそわひしき

○此節ノ春ノ日ノ光リノヤウナ難有イ御恵ヲ蒙リマスル私テコサリマスレトモ年カヨリマシテカヤウニ頭カ雪ニナリマスルハサ難義ニ存シマスルコマリマシタ物テコサリマス」「上七」

私に云、春ノ日ノ光ノヤウナ云云のみにては、作者のむねとせられし味ひをは、初学とみに心得かぬへく、よりて今少しいひとくへくは、

此節ノ春ノ日ノ光ニタトヘ奉ル所ノ春宮様ノ御所テカク難有イ御恵ヲ蒙ツテ行末頼母シイ事トハ存シマス」「上七」ル私テ以下前訳の如し

かく訳せされは、春宮の御息所といへる詞の用なきに似たり、次の「つくはねの木のもと毎に立そよる春のみ山のかけを恋つゝ」

(古今・九六〇)の訳には、春宮の御蔭をと云はれしか、こゝは其訳落たり、次の「春来れは雁かへるなり」(古今・三〇)云々の訳のことくに、いかゝ致も詞に用ある所は詞の意をも訳すべくなん、

【守部云、新説細かに見得たり】

69、春霞たな引山のさくら花うつろはんとや色かはりゆく

○霞力棚引テソノ霞へ色ノウツ、テミエルアノ桜花カチ」〔上八六〕
ラウトテヤラ霞ノ色カ替テキタ」

先師源固云、訳の霞力棚引テ其霞ニ色ノ移テミエルにては、初学かへりてまとひ安きなり、かの「春霞色のちくさに」〔古今・一〇二〕又「霞たつ春の山辺は」〔古今・一〇三〕などは、もはら霞に用あれとも、こゝはたゞ山の桜をいはん料に、時のものにて春の山をけしきせしのみ也、さるときはさくら花のちらんとてにや、花か色変り行といふにて、霞には用なかるへし、試にいはいは、

霞カタナ引テ ノトカニ面白イ 山ノ桜花ヲ見レハ昨日」〔上八七〕
今日咲タト思フホトニ早ヤチラントテヤラ色カ変ツテキタ サテモくハカナキ花ヨ

知至私にいふ、実にしかり、いかにといふに恋の歌にも上はおなしくて、下「みれともあかぬ君にもあるかな」〔古今・六八四〕は人を山さくらになぞらへて、みれともくあかぬといへる意にて霞には用なかるへし、されは霞かかくして花をみせぬ故に、あかぬといふへきを、みれともあかぬとはいふへからず、又霞にかくれてみられぬ意ならは、「かくす」「へたつ」「こむる」などの詞あるに、たな引と「〔上九五〕はいふへからず、〔たな引とは横になびくをいふ、いゆきは、かりたな引ものを（万葉三三二）なども富士の峯に横引たるをいふ又俳字に棚とかけるもその心せしにや霞かかくす故にみあかぬといは、花をもてはやす心あさかるへし、〔もあかす云々、このうたよりかけるなるへし〕されはさかりなる花をみるごとく、いくへんみても逢てもくあきたらぬといふ心なるへし、かくみる時は、こゝの春の歌も霞には用なくして、たゝ春の山をけしきせしのみならずや、

72、此里に旅寝しぬへし桜花ちりのまかひに家路忘れて」〔上九六〕

○今宵ハ此里ニトマラウコトチャ 此ヤウニ面白イ桜ノ花ノチルマキレニ内ヘイヌルコトハ思ヒ出サスニサ」

師云、〔先師源固、かたしをいふ、以下これにならふ〕訳にわすれてを思ヒ出サスニサとうつされし、けにさることならめと、又おもふに、「散のまかひに」といへは、家にかへる道のそこもわきかたく、ちりかふ花にまきれて、しられさる事をわすれといへるならずや、花ノ下ニ忘レル帰ルコト〔因三美〕景ニの意にて訳せられしなるへけれど、さるときは「ちりのまかひ」といふ詞用なかるへし、されは家にかへさのしられ」〔上九七〕さるにかこつけて、今夜は此里に旅寝すへしとなるへし、

家に行ことを家路といふ、さる事なれと、こゝは家にかへる道の事とみるへきなり、「ちりかひくもれ」〔古今・三四九〕「桜吹まきみたれなん」〔古今・三九四〕「ちりかふ花に道はまとひぬ」〔古今・一一六〕など

おなし心なるへし、又試にいはいは、

桜花ノ多ク雪ノ降ヤウニ散ルマキレニ家ニ帰ル道ノソチコチト覚東ナク迷ヒサウチャニ依テ今夜ハ此里ニ旅寝ヲシヤウ

おもしろさにとまるをちる花にかこつけていへるか」〔上九八〕をかしきなり、とちめの「て」もし「たれは」の意にみる時は「へし」の詞よくかなへり、

【守部云、源固か訳おたやか也】

127、

春のとく過るを読む 躬恒

梓弓春立しより年月のいるかこともおもほゆるかな

○古哥ニ梓弓春トツケテ読テアルカ誠ニ月日カ早ウ立テ 矢ヲイルヤウニ 思ハルハ春ニ成テカラマタ何ノマモナイニサテモ

く早ウ立タコトカナ

とし月といへるは、まことはとしの暮の哥なれはなるへし、春の暮の歌にては、此詞いか聞ゆ」【E二五】

私に云、此「梓弓」といへるは、たゞ冠辭にして下の「張」と「射る」とを相むかへたる也、さのみ古事をふみてよめりともみえず、ことさらに古哥に云々などあるへきにあらす、かく冠辭を訳する時は前後の【E二六】【E二七】などせし例にたかひて、初学のまどふ事になん、又年月とあれば実は歳暮の哥なるを誤て春につらねたりとするもいかゞ、作者躬恒撰者の一人にして己か歌を語りて異部にいるへきやよし、後にあやまり入しとせんも、前のことはかきをも【E二八】あやまりとせんか、凡詩歌の上には格調によりて理路にわたらさること常に多し、かゞはれりといふへし、

【守部云、歳暮の歌とするはかゞはれり、我國の詞には相つらねていひならへることは、上下の語一ツは用ありて一ツは用なきもの常に多し、古き文ともをみてしるへし、】

おとは山朝（あさ）越来れはほとゝきす梢はるかに今そなくなる

○訳略○音羽山といふにほとゝきすの声の意はなし」

私にいふ、こゝに「音羽山」とありたれはとて、此うたに「ほとゝきす」の声の意あらんとは思ふ人のあらんや、こゝは、宣長なほさりの口授を千秋などか書入しものか、かゞはれりといふへし、【E二九】

木の間よりも来る月の影みれは心つくしの秋はきにけり

○木ノ枝ノ間カラモツテ来ル月ノカケヲミレハ広ウミルトハチカ

ツテ 少シツ、ホカ見エネハ サテくシンキナモノチヤ 是ヲミレハ今カラ惣体モノコトシンキナ秋カ来タワイ」

師云、訳のことわりとみに心得かたくおほゆ、こゝはまた初秋の哥な【E三〇】（判読不能）落葉などはせぬものから、夏木立のしけりたりしも今は秋といふきさしには、おのつから木の葉もすき、かつは月の光も【E三一】少しはたかひて、さやかなるかたになり、木の間よりも来るかけを見て、今よりはやうやくに心つくしなる秋かよと、はつかなることに感して、行末をさへ【E三二】（判読不能）におもひやりてよめるなるへし、さらは今秋になりて、きらくしくさやかなる月も、「広う見るとちかつて少しつゝほか見えねは」にては、木の間といふに、ふかくかゞはれるにあらずや、

【守部いふ、月に心をつくすのみにして、木の間といふは夏の頃は月にかゝらぬ樹も、秋と成ては月にかゝれる所なとより、すぐに木の間とはいへる也、されは木の間と云を軽く見へき所也、新釈見得たり、】

秋風に声を帆にあげて来る船は天の戸渡る雁にそ有ける

○アレくアノ青イ海ノヤウナ空ヲ秋風ニ声ヲ帆ノヤウ【E三三】ニアケテ船ノヤウニ見エテ来ルモノハ鳴テ渡ル雁チヤワイ」

師かつていへることありき、訳のアレアノ青イ云々口氣をかきしやうなれと、歌主の心いかにあらん、思ふにこれは哥のひとつの様にて、「山河に風のかけたるしからみは」（古今・三〇三）などの類なるへし、されは声をあらはにあげてといふことを、帆にあげてといふより、即て来る舟はとつゝけ、さてそれは何なれば、天の戸わたる雁にそありけると、一首を舟もてしたて【E三四】たる歌ならずや、「風のかけたるしからみは」も、柵は人のかけて水

をせくものなるに、風のかけたるとけしからぬやうに上をいひて、
さてそれは何なりけりと下にてことわるひとつのさま也、こゝの
アレアノ青イ云々にては、それに見なしたるものにかきりて、「星
の林にこきかくる見ゆ」(万葉・二〇六八)などの類となりて、此う
たの本意にあらざるへし、

【守部云、新訳とき得たり、】

213、うきことをおもひつらねて雁か音の鳴こそ渡れ秋のよなく

○雁ノ幾羽モ連テ鳴テ渡ルヤウニ オレハ秋ノ夜ノウイ」上二四オ
コトノ数々ヲ思ヒツ、ケテ毎夜く泣テサアカス」

私云、雁ノ幾羽モ列ラネテ鳴テ渡ルヤウトイへハ、幾つもとといふ
数によりて見るこゝとなりて、一人の泣ことの比すへきものなら
ねは、中々に初学のもとひ安き人ほかの訳なり、よりて又例の、
ワシハ身ノウイコトノ数々ヲ思ヒツ、ケテ泣テハツカリサアカ
ス此頃ノ秋ノ夜ルくハサ

215、おく山に紅葉ふみわけ鳴鹿の声きく時そ秋は悲しき

○秋ハ惣体モノ悲シイ時節チヤカ 其秋ノ中テハ 又トウ」上四
② イフ時カイツチ悲シイトイへハ 紅葉モモウ散テシマウタ奥
山テ其散タモミチヲ鹿カフミ分テアルイテ鳴声ヲ聞時分カサ秋ノ
中テハイツチ悲シイ時節チヤ

ふみわけは鹿のふみ分る也

師云、これもおく山といふに、かゝはりたるにあらずや、いかに
といふに、奥山に住てか又行てか、見もし聞もしてよめりとせは、
歌の心せまくして、「秋は悲しき」といふ結句かなはぬに似たり、

又里に居ては奥山の鹿を聞んよしなし、されは鹿はおく山に住も
のな」上二五オ れは鹿といはん料にのみ、おく山といへるならすや、

「紅葉ふみわけ」は時をいふかもとにて、やかて「ふみわけなく
しか」とつゝけたるなるへし、さらは見もし聞もして読るにはあ
らて、鳴鹿といはん料に、上はいへるにて、暮秋の落葉せる時節
をいふのみならずや、「春霞たなひく山」(古今・六九)「五月まつ花
橘」(古今・二三九)などのたくひなるへし、いとむつかしきやうな
れとも、おく山にかゝはる時は、「秋は悲しき」といふとちめの、
たゞ奥山にのみかきりて、秋の尤悲しき時節を広くいふに」上二五オ
はあらず、されはかりそめにひかことせんには、

秋ハ惣体物悲シキ時節チヤカ 其中テモイツカイツチ悲シイト云
ニ 紅葉スル頃 鳴鹿ノ声ヲ聞時分カサコトニ悲シイ時チヤ
上の二句は鹿の形容に時節を兼ていふのみ、「白雲にはね打かは
し飛雁の」(古今・一九二)しら雲も、さやけき秋の月夜をいへは、
しら雲に用なけれど、雁の高く遠く飛を形容せる也、

【守部云、新説よし、】

題しらす

僧正遍照」上二六オ

名にめてゝおれるはかりそ女郎花われ落にきと人に語るな

○女郎花ト云名カヨサニ チヨツト馬カラオリテ見タハカリチヤ
ソ カナラス オレカ女ニ落タト人ニイフテハナイソヨ

おれるは、馬よりおりたるをいふ、をみなへしを折れるにはあ
らす」

私云、此歌序注に「さかのにて馬より落て」とあるをおもひて訳
せられしならめと、こゝは題しらすとあり、此集なる時に詞かき

のしられざるにもあ^{【五六〇】}らしを、題ありては此うたかへりて感ずるの誠すくなくして、俳倡雜戯に近かれはとて、など撰者の心して題をのそかれしもしるへからず、たゞ題なくて見る時は、上の「おれる」は馬よりとは見るへからず、是非に花を折ことゝせねはならぬうたなり、たとへ其実は馬よりおれるの心なるも、題なければ上は花を折れる、下は女に落たりとみねはならぬ也、それも読る僧の名なければ、落たりといへることはさたかならず聞ゆへし、又おるゝの^{【五七〇】}「お」と折るの「を」との文字のたかひにて、こゝは「おれる」とあるからに、馬よりおれるなりといはゝ、「お」もし「を」もし中むかしよりのかんなの文、今にのこれるものに、花を折るの「を」もしなるへきか、「お」もしなるもの甚多し、しかれは「お」「を」の文字もて此事はさためかたし、たゞ此集に題しらすとありて、僧侶のうたなるをおもひて訳するは、撰者の心なるへし、訳の正しきものとすへくなん、されと撰者の心にはあらざらんかも、はかりかた^{【五七〇】}けれと、宣長もかくときしかは、今はかりに序注の題のことはの意をも訳すへきものか、しからはこゝは、かのつらゆきかそなりける梅の花を折て、則歌に「人はいさ心もしらす」(古今・四二)とよめるたくひにて、馬より誤りて落たるを、其まゝそなりける女郎花を折て、則歌に「名にめてゝ折れるはかりそ女郎花」といへるなり、われ手を懸て女といふ花を折はをりたれと、たゞ名にめてゝ折れるのみぞ、ふかく心あるにあらず、さるを汝女郎花よ、われ^{【五八〇】}女に落たりなと人に語ることなかれ、とこととはのおもてにはいひて、題の馬より落てとあるにて落といふ字のはたらきありて、逸興なる所はしらせたるものなり、さする時は上句の語

勢もおたやかに聞えて味ありておほゆ、前訳の如くならば、題にも馬より落てといひ、上句にも馬よりおれるといひ、下句にも落にけりといへることゝなりて、哥のさまいやしく、詞のつゝきおたやかならず聞ゆるをよくく吟し味つて見よ、又かへすく落ると^{【五八〇】}いはんより、題には馬より落てよめりとし、歌はたゞ女郎花をめてゝ折たるか、只花をとするのみなるそ、女といふ花なれば、われ女犯の罪に落たりなと人に語ることなかれ、と三所に転して意ひとつにつらなりてこそ上手の業なれ、されと此うたの興ありて誠すくなきや、此僧正の得たる所ならんか、このすか
たの歌は
初學の好みまねふへき
まにはあらざるものなりしかるときは又例の、

女郎花ト云名カヨサニ チヨツト折テ見タノソ ソレヲオ^{【五九〇】}
むレカ法師ナカラニ 女ニ手ヲ掛テ 女犯ノ罪ニ落タナト、人
ニ云テハナイソヨ。シテソノ落タノハ落タナレト馬カラ落タノ
ハホンノコトチャ エへゝゝシテ以下題の意を訳す、此事さきに清水の光房のものかたりの序
に、宣長説おたやかならず馬よりおれるにはあらで女郎花ををれる
なるへしといはれき、大かた
われとおなし心ならんか、

【真■判読不能】云、承德康和の頃より以来仮字正しからず、しかれは「を」「お」の文字もて定めかたし、】

227

女郎花うしと見つゝそ行過る男山にし立りとおもへは

○アノ女郎花ハア、イタツラナ女チャト思ウテ オレハヨソニ見
テ通り過テイクコ、ハ男山ナレハ男ノ中ニ交テ居ル女チャト思フ
ニ依テサ^{【五九〇】}「【六一九〇】

師云、「うし」をイタツラナとうつされたるも、さるよしもあるへけれど、又おもふに、「を」をらて過うき今朝の朝顔」(源氏物語・夕顔)などの「うき」とおなしく見る時は、余所に見て過ゆくこと

を「うし」といへるにはあらずや、かくては詞のつゝきむつきやうなれと、古哥のかゝる類もある也、

女郎花ヲ折タク思ヘトモ 既ニ男山ニ立テ主アル女ナレハ徒ニ見過ルコトヲウシト思ヘト エ折ラレネハタミイシテ行過ルチヤ」^{二一〇五}

男の中にまじりて、いたづらな女とうつされし、けにおかしく興あれと、「うし」といふ詞のよくなへりとも聞えず、

【守部云、新詠よし】

228、秋のゝにやとりはすへし女郎花名をむつまじみ旅ならなくに

○トマルナラ秋ノ野ニトマルカヨイ 女郎花力有テ女ト云名カムツマシサニ依テ 余所テ寝ルヤウテハナイハサテ

二の句はもし、心をつくへし」

師云、かくては「旅ならなくに」の詞おたやかならず、「ならなくに」は俗語にテハナイニなとうつすは常也、^{二二〇六}又「は」もし心をつくへしといへるもいかゝ、「は」もしろき所集中に多し、「人にはつけよ」^{二二〇七}の「は」もしとおなじく軽く見へきなり、

女郎花ト云名ノ睦シサニ 今夜ハ野ニトマラウワイ 旅行ニコソ行暮テ野宿スルモノナレ旅テモナイノニ野ニトマルノハ女ト云名ノ睦シサニサ

訳の余所テ寝ルヤウテハナイニにては、「旅ならなくに」の詞かなへりとも聞えず、

230、女郎花秋のゝ風に打なひき心ひとつを誰によすらむ」^{二二〇八}

○女郎花カ秋ノ野風ニナヒクカ 誰ニ心ヲヨセテアノヤウニナヒクヤラ

心ひとつは、たゝ心といふことなり」

私に云、かくてはいかにそや聞ゆ、又「心ひとつは、たゝ心といふことなり」とはいかなる故にかしり得かたし、われおもふに、秋の野風といふに、吹かたのさためなきけしきをいひて、かくさためなく打なひくは実情のうすき事よ、人は真情のたゝ■^{二二〇九}（判読不能）なるものなるを、其たゝひとつなる心をあまたの人になひきよする」^{二二一〇} 本心や、など女のうへにとりなして歌とせる也、されはまた例の、

アノ女郎花カ 秋ノ野風ノ吹マニ ソチラコチラト誰カ方ヘモ上ハニハツカリ打ナヒキ氣ノシレヌ ウハ氣ナ女チヤ サレト人間ノ実ナ心ハ唯一ツナルモノヲソノ本ノ心ハ誰ニヨスルテアラウ

かく見る時は、ひとつはたゝ心といふにはあらざるへし、「こころひとつを」の「を」もし「なるものを」の「を」の如くおもく見へきなり、

【天野政徳云、新説宜なり、】

【守部云、宣長解たらす、新説見得たり、弘訓の両点宜也、心ひとつはおもひ■^{二二一一}（判読不能）といふかことくして、ひとつといふに用あり、】^{二二一二}

是貞の皇子の家の哥合の歌

266、秋きりは今朝はな立そ佐保山の柞の紅葉よそにてもみん

○霧ハトウソ今朝ハ立テクレルナイアノ佐保山ノ柞ノ紅葉ヲ余所ナカラナリトモ見ヤウニサ」

私に云、訳にて哥の意は明らかなり、其地に望みては、さらすともたゞ哥合等の題詠に地名を讀いれんことの一首のうへに、其詮なきは見えされは、こゝも佐保山をとりいてしうへは、柞は色のうすきものにして佐保山に多き所なればなるへし、柞の薄き」^{三三三}ニ^{三三}紅葉はうすきりも立へたつへく余所にしては見かたしといふ心なるへければ柞につきて佐保山は出たるなるへし、次のうたにも「佐保山の柞の色はうすけれど」(古今・二六七)又「佐保山の柞の紅葉ちりぬへみ」(古今・二八二)などをおもへ、

龍田川もみち葉なかる神奈備の御室の山に時雨ふるらし

○此川ニモミチバナカレル 神奈備ノ御室ノ山ニ時雨カシテ風カ吹ソウナ

しくれといふに、風の吹ことを、もたせたる成へし」^{三三三}私に云、かくかきりていはゞ、しくれにては水はまさるへけれど、風といはされは、山の木の葉を吹落して川に流すことにはなりかたし、との心よりかくいへるなるへし、いとかたくななる理論にして詩哥をともにとくへきの言にあらず、かゝる一首のしたて常に多し、

秋はきぬもみちはやとに降しきぬ道ふみ分て訪ふ人はなし
ふみ分てさらにや訪んもみちはの降かくしてし道と見ながら

○アノ家ヘハイル道ハ アノヤウニモミチハ散敷テ誰モ」^{三三三}人ノシラヌヤウニ フミ分テ来ヌヤウニト隠シテアル道チヤニ
ソウト見ナカラソレヲフミ分テ 今更見舞ヘキコトカナ」
○又ソウト見ナカラフミ分テ見舞ヤウハナイ」

私云訳の後の詞ソウト見ナカラ云々にては上下の句を其儘順にして見られ、「さらにや」の「や」文字「やは」のことく見られたれと、山ふかき谷の細道などこそさることもありなめ、既にアノ家へハイル道ハ云々と説かれたることくほとちかく見渡さるゝ道とすへく」^{三三三}家ちかき門のほとりにての事としてはふみ分て訪はんやうなしとはいひかたし、云過たるにあらずや、こゝはたゞ「もみちは」といふ五文字より下を上句の上に転して冠らしめて見るへきなり、さる時は詞おたやかに心明らかなり、此うたかへしのうたさまに見ゆれば、其しらへの勢ひをおもひて前歌の次につらねられたる撰者の心ならん、
この「さらにや訪ん」の「にや」は「咲花の色にや恋ん」(古今・四九七)などにおなじく見るへし、

【守部云、新訳よし、知至常に撰者の意を忘れず見る、それよろしき、】

是貞の皇子の家の歌合のうた」^{三三三}
わか来つるかたもしれられず暗部山木々のこの葉のちりとまかふに

○此クラフ山ノ木共ノコノ葉ノ最中チリマカフノテ通テ来タ方モトチカラ来タヤラシラレヌ」

私云、訳の意大かたはしられたり、たゞ前にもいふかことくこゝは歌合のうたなれば、「くらふ山」とよみて詮をときたらぬにや、是は「くらふ山」とよめるに用なければかなはさるなり、其詮なるはいかにといはゞ、わか来つるかたもしれられすといへるか、則「くらふ山」に「くらき」といふをおもはせ、さてそれはなに故そと」^{三三三}おもへは、木々のこのは多くちるか故に「をくらき也」とつゞき、をかしくとりなせしならすや、

雪ふれは冬こもりせる草も木も春にしられぬ花ぞ咲ける

○冬カレテマタ芽モ出ヌ草モ木モ雪カフレハ春ニハ沙汰ナシノ花カ咲タワイ 惣体花ハ春ニ成テ咲クモノチャニ

師云しらぬを沙汰ナシとうつしかたし、花は春の領掌するものなれば春にあつかりしらぬとなくてはいかにそやおほゆ、「神そしるらん」「空にしられぬ」、「エミモ」みなあつかりしりしらぬとわけていふへく、いせものかたりの「しるよし」て「もおなし、

あさほらけ有明の月とみるまでに吉野の里にふれるしら雪

○カウ夜ノクワリツト明ケタ時ニ見レハテウト有明ノ月ノ残ツタ影トミユルホトニ吉野ノ里ニ雪力降ツタ

千秋云、朝ほらけのほらけは、朗明のつゝまりたる也、集中恋三、しのゝめのほからくと明行は、是也」

私に云、訳のクワリツト明タ時ニとは田舎人の耳には日出の後まてなにとりちかふへきにもあらず、「エミモ」朝ほらけ」は、しのゝめ過るより後、日出のきはまてをいふへくや、日出の後をはいふへからさるか如し、千秋か「ほからかあけ」の説かなへり、又引けるうた其徴を得たり、しかれともいまたくはしからず、初学のために今いさゝかいはん、「しのゝめのほからほからと明行は」とはしのゝめのまたをくらきほとなるも見るまゝに、少しつゝほからかにくあけゆくをいふ、下句に「おのかきぬく」となるを悲しめるにても、日出の前またをくらきほとにして、クワリツトなど「エミモ」いふへきほとにはあらさるをや、さきに橘の守部の此事を物かたりの序にいへるに、今の俗「しらくあけ」といふほとそ、よくかなへるなりと申されたり、よくかな

へる也、

334

梅の花それともみえず久かたのあまきる雪のなへてふれゝは

○三あまきる雪カオシナヘテ トコモカモフツタレハ 梅ノ花カ梅ノ花トモミエヌ 同シ白サチヤニ依テ」

私云、「あまきる」を冠辞にせられし、さる事もあるへけれど、又おもふに「花」と「雪」とわきかたきほとにふりしきる故にかくよめりとせは、冠辞となさてもとく「エミモ」とくへきなり、たゞ初学の人の耳ちかからんこそこの訳の本意ならぬ、

三天カ霧ノ立タヤウニ 雪カオシナヘテトコモカモ空カウスクラクナルホトニフレハ梅ノ花カ同シ白サチヤニ依テトレカトレチャト見エヌワイ

【守部云、こゝは「なへて」といふ詞、軽く見へき也、】

古今和歌集遠鏡補正上巻終 「エミモ」

古今和歌集遠鏡補正下巻

361

千鳥鳴佐保の川霧立ぬらし山の木の葉も色まさりゆく

○佐保山ノ木ノ葉モ 段々色力増ツテ来タ 此通りナレハ今迄ニモウ 二此佐保川ノ霧カタツタサウナ

千秋云露しくれのみならず霧にても木の葉は色つくものなる故にかくよめり」

先師源固云、千秋か霧も木の葉染る云々、かゝはれりといふへし、こゝのものもて、かしこのものをおしはかるうた、いと多し、「み

山にはあられふるらし外山なる」(古今・一〇七七)のたくひとせは、
 「下まこゝも、山の紅葉せるを見て、「佐保川のきりも立らし」と
 おしはかりていふのみ、きりにて木の葉を染るといふにはあらず、
 「龍田川もみちはなかる神なひの御室の山に」(古今・二八四) など
 今とおなし、

かへる山ありとは聞と春霞立わかれなは恋しかるへし

○北国ニハカヘル山ト云山カアルト云コトナレハ其名ノ通りニオ
 ツ、ケ御無事テ カヘラツシヤラウトハ思ヘトモソレテモアノ霞
 ノ立テアル方ヘ 立テ別テイカシヤツタナラハ恋シカラウ」

師云、「春霞」は「立別」の「立」にのみかゝりたる冠辞にて「春
 霞」はとくに用なきのみ、たゞ次なる「しら雲の立なん後」に(古
 今・三七二)「下まこゝいふにことならず、此集の歌さ大むねしかな
 り、知至ひそかにいふ、宣長詠の霞ノ立テアル方への八字、例の
 三となして冠辞となせは見やすかるへし、此うたの次の「をしむ
 から恋しきものをしら雲の立なん後は何こちせむ」(古今・三七二)
 の詠○ナコリヲシウ思ヘハ マタ立タシヤラヌ内カラハヤ此ヤウ
 ニ恋シイ物ヲ三立テイカシヤツタナラ アトテハトノヤウナコ、
 チカスルテアラウ」かく訳せられて、前の「春霞」とこの「しら
 雲」と全く同じ冠辞なるを、こゝにては三となし、前に並ひたる
 うたにては、霞ノ立テアル方へなと訳せられしは、詠例の正しか
 らざるものか、又いかなる異見あり」下ましか、おほつかなし、

から衣立日はきかし朝露のおきてし行は消ぬへきものを

一御立ノ日ヲハ明日チヤト云コトハ ワシヤモウ聞マスマイ ワ

シヲハ捨テ御出ナサルコトナレハ 明日御立チヤト聞テハ明日ノ
 朝ニナツタナラ ワシヤモウ露ノキユルヤウニアラウト存シラレ
 マスモノ」
 私云、「朝露の」といへはとて、必「あすの朝」とするもかゝは
 れるに似たり、たゞ「置てし」といはむか為に、朝のとおけると
 して、うたの意は聞えたり、一首中に冠辞二ツあるはめつらしけ
 れは、冠辞となさてとかれたれば、かくもなれるか、「朝露」下ま
 の」といへるをは、かるく見へきにや、

白雲のこなたかなたに立別れ心をぬさとくたく旅かな

○雲ノアチコチヘ分レテイクヤウニ 今度遠イ間タヲヘタテ、別
 レル悲シサニ 今ハナムケニ進スル此手向ノヌサノコマナカヤウ
 ニ拙者ハイロくニ心ヲクタイテ サテくナコリヲシイ御旅立
 テコサルコトカナ」

師云、「しら雲」は「立別」の「立」にのみかゝりて、「こなたか
 なた」まではかゝらず、「此方彼方」は家と友と別るゝをいふへ
 し、雲は一村つゝ分れても、風の吹かたにのみ行ものなれば、東
 西とは別れぬなめり、次の「秋きりのともに立出てわかれなは」
 (古今・三八六)も「秋きり」下まの「立」にのみかゝりて、「と
 もに」といふ詞にはかゝらず、すへて冠辞の間に句をへたてゝつ
 けたる、集中猶多し、

【守部云、源固か説よし、宣長のヌサノ細カナヤウニもなと解過たり、】

音羽山木高く鳴てほとゝきす君かわかれを惜むへらなり

○此音羽山ノ高イ木ノ上テアレ子規カ高ウナキマス以下略」

私に云、「おとは山けさ越來れば」(古今・一四二)の例にならば、
 爰にも「音羽山」といふに子規の声の意はなしとあるべき也、又
 声の意あらんには、訳の木ノ上テアレの下に、音高ウ子規カ云々
 と「音」の字を加ふべき也、いつれにも訳の定らざるはおほつか
 なし、さきに天野政徳の見られて、「音」の字を加ふべき所には
 あらず、たゞ訳の一定せざるものと申されたるぞ、よろしかる
 べき、【下四二】

ふちはらののちかけか唐ものゝ使に長月のつこもりかたにまか
 りけるにうへのをのことも酒たうひけるついでによめる

もろともに鳴てとゞめよ蜚秋のわかれはをしくやはあらぬ

○トモくニ泣テトウソ御トメ申セキリくスヨ 今秋ノ別ノ時
 分ニ御別レ申スハ コレホトナコリ惜イニ ソチハナコリ惜シウ
 ハナイカイ」

師云、訳の秋ノ別ノ時分ニとはいかゝおほゆ、こゝは詞書に其心
 をふくめたりと見ゆれば、哥の意は、我々は別を惜てなくに、汝
 も暮行秋に別れんことの惜からんを、声を助て、ともく【下四三】
 に泣てとゞめたらは、秋も人も自然とまる事もあらんかに、など
 の心ならずや、されは「秋の別」といふを「蜚」にのみかけて見
 るべく、訳の秋ノ別ノ時分ニ人ニ別ル、ハ其方モナコリ惜ウハナ
 イカイにては、「別」といふ詞うこきて断おたやかならず、たゞ
 「秋の別」の下に「汝も」の二字をくはへて見るへし、又、紫式
 部か「鳴よわるまかきのむしもとゞめかね秋の別れの悲しかるら
 ん」(紫式部集・二)など、こゝより出たり、

ほのくとかあしの浦の朝きりに嶋かくれ行舟をしそおもふ
 ○夜ノウスくト明ケテ来ル時分ニ 海上カラ見レハ アノ向ヒ
 ナ明石ノ浦カ朝霧テカクレテ見エヌヤウニナツテイクアノケシキ
 ヲ 遠ウ【下四四】ヨソニ見テ過テイク 此船中ノ心ハ サテモ
 く心ホソイ物カナシイコトチャ」

古注云此哥はある人のいはく柿本人丸か也

○打聞に出されたることく、今昔物語に、小野ノ篁卿の哥とての
 せたるぞ、よろしかるべき、但し明石にて、海をなかめてよめる
 とあるは、下句を心得誤りて、おしあてにいへる詞也、今昔物語
 古本、廿四の巻に出たり、余材四の句ときたかへり、すへて嶋か
 くれとは海をへたてたる所の、かくれて見えぬをいへり、必しも
 嶋にはかきらす此哥にては、朝きりにかくれて、あかしの浦の見
 えぬを、海の沖よりいへるなり【下四五】

私云、此歌ひとまろの哥ならぬことは、しらへのうへにしられた
 り、たゞし、宣長の今昔物語によられて篁卿のうたとせられし、
 さることもありぬへけれど、そはともかくも今はたしかなること
 にさためかたし、たゞいかにも今の京のはしめより後のさまなる
 へく見ゆ、さて此歌の下句の意を心得誤りて、おしあての詞なり
 と前訳に改めとかれたるはいかゝ、さることもありぬへけれど、
 「嶋かくれ」といふことの海上より見るに、明石の浦の霧に隔ら
 れて見わかぬをいふことにとかれたるぞ、おほつかなき、「嶋か
 くれ」は、たゞ船の嶋にかくれゆくこととせは、耳平らかに聞ゆ
 へし、月の雲にかくれたるを「雲かくれにし夜半の【下四六】月」(紫
 式部集・一)とも、また「葉かくれ」「木かくれ」「深山かくれ」な
 と常にいふこと多し、しかあれば、たゞ明石の浦よりはるくと

沖ゆく舟の、見るく嶋にかくれゆくを見つゝおもひやりてよめ
りとせは、おたやかなるにあらすや、訳の云々、いとめつらしき
説にて異説を好めるに似たり、よしそはさることあらんにも、今
は「雲かくれ」「木かくれ」は、雲にかくれ、木にかくるゝ事とし
て、「嶋かくれ」のみさる意にものいふとも、ひろくわたりて通
しかたし、されは、われ、又、試にいはゝ、
夜ノシラくト明ハナル、時分ニ 明石ノ浦カラ海ノ面遠クミレ
ハ 朝キリノ立タノニアノ沖ナ嶋ノ方ヘ漕キ行ク船ノミルウチ
ニ「下六」ハヤモウ嶋ノカケニカクレ行クワ サテモくアノ船
ニノツタ人カ心細イ物悲イコトテアラウトサ思ハル、

415、いとによる物ならなくに別路の心ほそくもおもほゆるかな

○ナンテモ糸ニヨレハ 細ウナルチャカ カウシテ故郷ヲ別レテ
来タ旅ノ道ハ ソノヤウニ糸ニヨルモノテハナイノニ サテモ
くマア心細ウ思ハル、コトカナ

私云、訳のことはいかなる事ともみに心得かたし、よりておも
ふに、こゝは「かたいとをこなたかなたによりかけて」(古今・四八
三)などいへは、「いとによるもの」とは、よりあはせある「糸」
といふにて、さて、そのよりあはせたる糸を、一かたにわくれは、
二筋となりて別るゝ「下六」故に、「細く」と縁語をつらねて哥と
せるなるへし、訳の意は「糸」の縁はたゝ「細く」といふ「細」
の字にのみかゝりて、別れにはかゝらす、又、何にても「糸によ
る」といふもことわりしられす、われはやく此事を師のもとにい
ひしに、師もうへなはれて、則、
糸ニヨリ合セタルモノコソ分レハ細クナルナレ糸テモナイノニ

今人ニ別レユク身ノ心細クサ覚ユルワイ 悲シイコトカナトウシ
テカウナモノチャソイ
なとたはふれられしか、よくかなへるやうにおほゆる也
【守部云、糸ニヨレハといふも詞つたなし、糸にの「に」文字、万葉「妹にこ
ひ」の「に」とおなし、訳の意ならんには、「妹を」といはんか如し、】
此旅はぬさもとりあへず手向山紅葉のにしき神のまにく
○此度ノ旅ハ御供ユエニ ヌサモ得用意致サナンタ ソレ故神
ノ「下七」御心任セニト存シテ 即此山ノ紅葉ノ錦ヲソノ俣手向
マスル

師云、こは「とりあへず」とつゝきて、「とりあへず」は今の俗
いふ詞にて、「其俣」「早速」又は、「それを直に」などいふかこ
とし、
「とりあへず」といふは「よき」といふことなり
「古今・八九六」なども同じ
されは、訳の後の意にて、即ソノマ、とあ
るにてたれるを、御供故に得用意致サナンタにては中々にまとふ
へし、御供の旅にはぬさもたぬ例ありや、しらす、又例の、
此旅ハ秋ノ時分ナレハ 麻モソノマ、紅葉ノ錦ヲ手向山マスル神
ノ御心次第トレナリトモ御受納アラレヨ
前訳の得用意致サナンタに、「とりあへず」といふ意あるやうに
て、まきれやすし、
「下七」

けふり立もゆとも見えぬ草の葉を誰かわらひと名つけ初けん
○ワラ火ナラハ煙モ立テモユルハツチャニ 煙モタ、スニモユル
トモ見エヌ 草ノ葉チャモノヲ 誰カワラ火ト名ヲ付初タコトヤ
ラ
千秋云、此哥、物の名のよみさまにあらすされは、此部にいるへ

きにあらす、」

私云、千秋かこと、撰者四人、物の名の哥を見分かぬへきや、又古より其さたなし、既に宣長もワラ火ナラハといひしは、稲の「わら」の「わら火」と見られしなり、もし、たゞ「火」といふ縁にのみかゝりて見られたらば、其よいしいひおかるへし、宣長の精密、^{ワラ}あにこゝに心つかさらん、千秋は古哥の類例にのみかゝりて通達なき故に、今の「藁火」といふ農家必用のももの、古哥に見しらぬはなきものとせるにや、水田の法、和漢今古大異なるなるをや、「藪」を「藁火」と読かくせる、何そ、ものゝ名の読さまにあらすとせむ、

475

世の中はかくこそありけれ吹風のめに見ぬ人も恋しかりけり

○世ノ中ト云モノハマア カウシタコトチャワイマア聞テ下サレ
マター目モ見タコトモナイ人モ此ヤウニ恋シイチャワイ

師云、「かくこそありけれ」をマアカウシタコトチャニ云々にては、詞のつゞき落着なきやうにて、たしかに聞とりかたし、世の中には^{ワラ}理外ふしきなることのあるものなりといふことを、「かくこそありけれ」といへるにて、下の見もせぬ人の恋しき理外なるを、「かくこそ」とさしていへるなるをや、

右近の馬場のひをりの日むかひにたてたりける車の下すたれより女の顔のほかに見えければよみてつかはしける

見すもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなくけふやなかめくらさん

○見ヌテモナシ 見タテモナイ人カ 此ヤウニ恋シイチャカ コ

レテハワケモナイコトニ 今日ハ一日シンキニ思ウテクラステアラウカ」^{ワラ}

私云、訳のたゞ雅言を俗語にうつしたるのみにては、ことの心しりえぬ人もありぬへし、是は詞に「車の下すたれより女の顔ほかに」といへるは、則「見すもあらず見もせぬ」といへることはを助けたるものなり、その心をあはせとくへきなり、

スタレヲ隔テ、ホノカニ見レハ 見ヌテモナシアラハニハツキト見ネハ 見タテモナイ人カ此ヤウニ恋シイチャカ 以下前訳ノ如し、

春日野の祭りにまかれりける時に物見に出たりける女のもとに家を尋てつかはせりける

478

春日野の雪まを分て生ひ出くる草のはつかに見えし君はも」^{ワラ}

○春日野ノ雪ノ間カラハエテ来ル 草ノチツトハツカリミエ初メ
タヤウニ ハツ／＼ニチヨツト見エタ御方ワイノマア

私云、「はも」はみな歎辞を云のこせるなり、此哥のとちめの御方ワイノマアも其心せるならめと、田舎人のたゞなほさりに見過くへきにあらす、猶、集中雜上「笹の葉にふりつむ雪のうれをおもみ本くたち行わかさかりはも」(古今・八九二)の訳には、上略オレモ此ヤウニ段々年力寄テ衰ヘテ行カ昔男サカリノ時節ハマアイツノコトテアツタソイハア／＼／＼と歎辞を訳せられしか、こゝとおなし「はも」にて、いかなる異見かありけん、全くおなしことなるをや、万葉「初瀬川はやみはや瀬をむすひあけてあかすも」^{ワラ}いもと訪ひし君はも」(万葉・二七六〇)などをとれるうたにて、「君はも」といへるに、ふかく恋しき情、ことはいひたらずして、たゞ歎息の声をあくる勢ひあるものなり、今人もかなし

みの甚しき時には、是はもア、く、その事ハア、く、く、と歎く、むかしにことなることなし

はつ雁のはつかに声を聞しより中空にのみ物を思ふかな

○空ヲ飛テユク始メテノ鴈ノ声ヲ聞ヤウニ 人ノ声ヲハツくニ
チヨツト聞テカラ心カヒタスラウチウテンニナツテ サテモく
物思ヒヲスルコトカナ

師云、こは、「はつ雁」は「はつかに」といはん料にのみおきて、

「声」といひ、【テニ〇〇】 「中空」といひ、「鴈」の縁語もてした
てたるうた也、初メテノ雁ノ声ヲ云々にては、「はつかりの」五文
字にのみふかく心をいれてうつされたるは、歌主の心にやあらん、
哥説の心にやあらん、

【守部云、固か言のことし、宣長五文字を説くこと過たり、】

つれもなき人をやねたくしら露のおくとは歎きぬとはしのはむ

【三起ルト云テハ歎キ 寝ルト云テハシタウテアノアイソモナイ気
ツヨイ人ヲ此ヤウニ思ハウコトカヤ サテモ口ヲシイコトヤ ト
ウソ思フマイソ

私に云、訳の、ねたく口をしきか故に、トウソ思フマイソにては、
はしめに歎きたひしのはんといひて、後には願くはおもはさら
なん口をしき恨あるか故になとの心、前後かけ合かた【テニ〇〇】
く、ことの心わきかたかりけり、さるに、此うたの前後に並へる
うたは、皆ひとすちに人を恋ふるのうたのみ、中に此一首異様な
る心なるも、此集の例にあらず、訳には「人をや」の「をや」の
二字いと軽く見られたれば也、たゞ常のことく反語に見へきなり、

「をや」とつよくいへるか故に「ねたく」とかた言に言し古言の
例多し、是亦一格也、又かりそめにいは、

カウ恋シウ思フ心ニハ 如何ホト気強イトテモソノ人ヲヤ ネタ
ミ悪モウソ ケツク悪ウハ思ハレナイノサ 【三ソレ故ニ起ルト云
テハ我泣キ寝ルト云テハ只思ヒシタハントハツカリ今カラ思ヒマ
スヨ】【テニ〇〇】

など、行末まで兼て厚く思ふ情そ、前後の歌並よく、此集のむね
にかなへるにあらずや、

【政徳云、論のことく「をや」は反語也、】

【守部云、「つれなき人」を起ふしに思ひ歎くが、ねたくくちをしき也、「ねた
く」にて切て心得へき也、「や」は疑ひにて、いかなる事にてつらき人のかく
やらん、と其故よしを疑ひたる也、】

沖辺にもよらぬ玉もの波のうへに乱てのみや恋わたりなん

○ワシカ恋ハ沖ノ方ヘモ磯ハタヘモヨラスニ浪ノ上テ ミタレテ
イツマテモ此ヤウニ 恋シイくト思ウテハツカリ月日ヲ立ルテ
アラウカ

私に云、此歌「恋渡りなん」は「恋わたるらん」なるを、中昔に
伝写の誤なるもしるへからず、情理語勢実になかり、故は、「恋
渡る」テアラウカと今より後を兼ていへるなれば、「恋渡るらん」
ならねはかなはず、又、今より後をかねてトウソ心カ【テニ〇〇】
乱レテ「恋渡りなん」と自ら願ふ意は、情理に於てなかるへし、
心を収めて、みたれぬやうに恋て、終に思ひを遂くへくおもふは、
人の常なればなり、しかるときは「恋渡るらん」にて、宣長の訳
のまゝ、よくかなへり、

【政徳云、新論の如し】

【守部云、「りなん」は、將の延たるにて、則、將為といふ心なり、五十音第一第四の韻は令命、第二韻は「まし」と同意の例也、】

あしかものさわく入江のしら浪のしらすや人をかく恋んとは

【上】人ヲ今此ヤウニ恋シウ思フトハ思ヒヨラヌコトヨ

私に云、「しらすや」を己にかけて見られたれば、思ヒヨラヌコトヨと訳せられたり、他にかけて見へき所ならずや、是は君をかくわかもふへしとも君はしらすやといへるにて、次の「ふかき心をひとはしらなん」(古今・五三五)も、わかふかき心あるものを、
【下】君はしれかしとねかふ也、かくならへつらねられたる撰者のこころしるへし、されは、又、例に、

【上】ワシカイツカラ此ヤウニ 君ヲ恋シウ思フモノヲ かく恋んカウ思フタ

ラウトハ チツトモ君ハ御知りナサラスヤマア

【守部云、「しらすや」は、「しらすよ」の意と聞ゆ、私説の如くならは、結句「かくこふる」とあるへき歟、】

人しれぬ思ひを常に駿河なるふしの山こそわか身也けれ

○常住人ニシラス 思ヒラスルワシカ身ハ外ニハナイ 駿河ノ富士ノ山カサワシカ身チヤワイ ナセト云ニ富士ノ山モ火ハモエスニ常住煙力立テモユルハサテ

私云、訳の「常住」の下に「思」といふ字をくはへて、ワシカ思人ノと訳すへき所なり、初学のいつも「人」といふを、たしかに聞【下】とりかてなるもありけり、前後の哥の「人」字「君」の字とおなしく見へき所なればなり、

【守部云、「人しれぬ」は「人にしられぬ」のつゝまりたるもの也、】

わか宿の菊の垣根におく霜の消かへりてそ恋しかりける

○【上】イヤモウキツウノ消入ヤウニサ恋シイワイノ

余材打聴共にきえかへりの説わるし、すへてわきかへりしにかへりなどのるゐ皆其事の至て甚しきをいふ詞也、今の世の語にも、にえかへる、ひえかへるなど多くいふとおなしことなるをや

私に云、余材打聴共に「きえかへり」の説はいかにときけん、今はわすれたり、思ふに、「消かへる」を「消入る」とは訳しかたくや、魂【下】しひの消入るやうになりてよみかへりたるを、「消かへる」といふへし、消かへる霜は、朝な夕な置ては消、消てはおきするかゆゑに、消かへる霜とはいふへし、則、いくたひもおもひあまれる恋の切なるにたとへたる也、又、泉などの水高くわきあかりては、もとのひくきにつき、又、わきあかるか故に「わきかへる」ともいふへし、冷やかなる水の湯とわきてあたゝかなるも、もとの冷水となれるをこそ「ひえかへる」といへ、もとよりひやゝかなる水の「ひえかへる」とはいふへからざるをや、

710、誰かに夜かれをしてか子規たゝこゝにしも寝たる声する

【下】四五

○夜中ニアレ郭公カ ツイコ、テサ鳴ク声カスル イツモトマル里ハ トコノ里カシラヌカソノ里ヲハ 今夜ハトマルノヲ一夜カ、シテ メツラシイコチノ庭テ寝タルトミエル

是はたゝ子規の哥なるを、こゝに入しは、誤りなるへし、恋のたとへとしては、寝たる声するといへること、聞えかたし、しかるを恋の意に注したるは、しひことなり、菅家万葉には、夏

のうたとし、六帖には、ほとゝきすの歌とせり」

師云、訳のこと、さる事ならめと、またおもふ、一向に撰者の誤とせんも、ほいなければ、しひていはん、こゝは宮つかへの「二五」女房などにかたらふ男の、五月はかりなんとに、そのちかきわたりの他の局に立よりて、物いふ声を聞て、よみて其局につかはしゝゝ、など見る時は、古き物かたり文のさまなれば、恋の歌としては、かへりてほとゝきすのうたならんよりも、味ひありておほゆ、此前後の哥は、みな心かはりせし哥並に入られしは、撰者の心なることしるへし、さて、例の、

何所ノ里ニトマル郭公ヤラ 其里ニハ 今夜ハトマラテ 只此所ニ寝テ居テ 鳴ク声カスルアノ郭公メカ

おのか局の事なれと、「郭公」のうへにかけていへは、「誰か」「五五」里」といひ、又「寝たる声する」といふに、にくゝをかしき心あり、又「ほとゝきす」の哥にては、「寝たる声す」「五カ」といへる詞、興なし、

【守部云、新説めつらしく、よろし、】

五条の後宮の西の台に住ける人ほいにはあらで物いひわたりけるを正月の十日あまりになんほかへかくれにけるあり所はきゝけれとえものもいはて又のとしの春梅の花のさかりに月のおもしろかりける夜こそをこひてかの西の台にいきて月のかたふくまであはらなる板しきにふせりて読る「「五五」」

ありはらのなりひらの朝臣

747、
て 月やあらぬ春やむかしの春ならぬわか身ひとつはもとの身にし

○今夜コゝへ来テ居テミレハ月カモトノ去年ノ月テハナイカサア月ハヤツハリ去年ノ通りノ月チヤ 春ノケシキカモトノ去年ノ春ノケシキテハナイカサア 春ノケシキモ梅ノ花ノ咲タヤウスナトモヤツハリモトノ去年ノ通りテ惣体何モ去年トチカウタコトハナイニタゝオレカ身一ツハカリハ 去年ノマゝノ身デアリナカラ去年逢タ人ニ アハレイテソノ時トハ大キニチカウタコトワイノサテモく去年ノ春カ恋シイ」「二六」

二つのやは、やはの意也、さて結句の下へ、もとのやうにもあらぬことかな、といふ意をふくめたり、然ふくめたる事は、月やはあらぬ、春やはあらぬ、月も春も、もとのまゝなるにといへる、上句にて聞えたり、すへて此朝臣のうたは、心あまりて、詞たらずといふは、かゝる所也、余材打聞ともにわるし、かの説とものことくにては、してととちめたる語のいきほひにかなはず、よくく語の勢を味はひて、心得へき哥ぞかし」

師云、訳のことわり、けに細にとき得られたるものから、「二六」猶「わか身ひとつ」といふことの、たしかにとき得たりとも聞えず、「わか身ひとつ」とは、かくれたる人に対して、二つなるものゝ、今は「ひとつはもとの身に」といひのこして、一つはかはれりといふをふくめたる也、たゝそのひとつかはれるか故に、「月」も「花」も「わか身」も、もとのまゝなからに、もとのやうにもおもはれぬ事よ、と言外におもはせたるものなり、結句の「して」といふ句、味ふへし

【守部云、新説こまかに見得たり、】

823、
秋風の吹うらかへす葛の葉の恨てもなほうらめしきかな

【上】ウラミヲ云テモくマアヤツハリ恨カハレヌ サテモく恨シイコトカナ」【下一七五】

私云、上句を【上】としてとかれたれば、只何ともなき恨のうたとなりて、いかにそやおほゆ、前後の哥並、皆、人の心かはりにあへる哥のつらなりに心つかさるなるへし、此うたの「秋風」の「あき」といへるも、撰者の心ありて此所に入られたることしるければ、「秋風」をもとくへきなり、

秋風ニ吹カル、葛ノ葉ハ 裏カヘリテ裏ノミルモノチャニチヨウトワカ身モ人ニアキラレテ

以下前歌につづく

【守部云、「秋風」の「あき」といふに用ありて「葛の葉」はつらね出たり、】

逢ことを長良の橋のなからへて恋わたるまに年そ経にける

○逢事モナイニヤツハリアヒカハラス 恋シタウテ月日ヲ送ルウチニサ

チニサ ハヤ何年カ立タワイ」【下一七六】

○又ハ逢イタイくト思ウテ 恋シタウテ月日ヲ送ルウチニサ

千秋云、後の訳の意なれば、逢ことを恋わたるとつゞきて、逢ことなくてと、いひかけたるにはあらず、をもしによれば、さやうにも聞ゆ、然れども、逢ことなくてと、いひかけたるやうにも聞ゆ

私云、訳も千秋も二かたにときて、いつれともさためされは、初学のためにいさゝかいはん、此うたは、逢ことをいつかくとなからへて月日を経ぬる事よ、といへるなり、「長良の橋」は、たゞ「なからへて」といはん料【下一七八】のみ、逢ことをなからへて恋わたるといふにて、則、逢ことのなきもの明かにしられたり、すてにしかるを上「逢事なし」といふ詞をおくへきやうなし、

すへて後の世のしらへなれば、さる事もあるへく、此時のしらへ高き哥ともの様にて見んには、逢事をなからへてといはん時に、

「逢事をなからののはしのなからへて」とつゞくるそ、調へたけ高く聞ゆるをおもへ、はしめ五文字より逢事をなからへてといひかけたりとせは、しらへいやしく聞ゆるならずや、只下に「恋わたる」とおかんかため、「はし」をとり出し、「なからへて」とおかんかため、「長良」といふ地【下一七八】名をとり出せしか、一首の作意ならずや

【令世云、知至か言、しかり、】

【政徳云、しらへ高くゆうに聞ゆるは、つゞけからにより、冠辭を用ふるも、哥のけたかからんことを恋ふか故也、】

【守部云、新訳の改、尤よろし、実にしかり、】

842、

おもひに侍りけるとしの秋山寺にまかりける道にてよめる

朝露のおくての山田かりそめにうき世の中をおもひぬるかな

○【一】今マテハ世ノ中ヲウイモノチャト云コトヲタ、ウカくトカリソメニ思ウテ居タコトカナ今度不幸ニ逢テ 世ノ中ノウイコトヲ真実ニ思ヒシツタ

師云、此訳に、すへて只序とのみ見ゆるをも心をいれて序の意をとかれたるに、此哥の「朝露」をたゞ【二】とのみせられたるは、いかにぞや、「朝露のおくての山田」は、【下一九九】山寺にかよふ道辺の其時に見るものにて、即て序とせしならずや、
【下一九九】山寺にかよふ道辺の其時に見るものにて、即て序とせしならずや、
なるべしされは、「朝露」は、はかなくかりそめなるによせあれば、
序にこゝろすへきにや、

今マテ何ノ心モナク ウカくト世ヲスコセシニ此度不幸ニ逢テ

ミレハ 此世ノカリソメナルコトヲ思ヒシツタ シテミレハホン
ニ此道ノ辺ノ朝露モワカ身モ 同シカリソメナモノチャ

【守部云、おなしく、にほひ響きなど心せし新訳よし、】

世の中はむかしよりやはうかりけん我身ひとつの為になれるか

○世ノ中ハ昔カラ此通りニウイ世ノ中テアツタカ 但シ又『下九
』オレカ身一人ノ為ニ 此ヤウニウイ世ノ中ニナツタノカ
千秋云、二の句やははたゝやの意也」

私云、「やは」とあるを、たゝ「や」の意とするも、おたやかな
らず、其まゝ「やは」にて反語にとくへきなり、もし「やは」の
意にてとけぬうたならは、さる事もありぬへし、上古の類にはた
まゝとあれと、今、こゝの哥は、さにあらず、いはゝ、

此世ノ中ハ昔カラ此通りニウイ世ノ中テ有タケカ カウウイ世ノ
中テハアルマイモノヲ 不仕合ナワカ身一ツノ故ニ世ノ中サヘウ
ク思フ様ニナレルノカ 此所ハト『下二〇五』ウモハツキト分リ兼
ルワイ

前訳のことくにては、己一人の悪風俗天下に移れるかと疑ふことも
見るべく、さる時は、其時の執政か、又は、反逆の人ならては、かゝる
事のあらんや、たゞ愚痴にくよくと自ら思ひまとへるさまなるへし、

【守部云、此うた、千秋のいへるやうにても聞え、又、反語とみても聞ゆ、か
ゝる事は、いひ試るもよかるへし、】

世にふれはことの葉しけき呉竹のうきふしことに鶯ぞ鳴

○世ニアレハ何ノカノト人ニイロく『三』ウイコトライハル、コトカ多テサ
ソノ度コトニ鶯泣マス

千秋云、鶯のことくにそなくといふ意也」

師云、千秋か言、中々にたかへり、只、訳のことく、「鶯」の字□『下二〇
』せしこそよけれ、かの「はつ雁のはつかに」古今四八二などいへるにお
なし、

【守部云、師説よろし、】

左近将監ノ宮ヲメシメシテケレタルとけて侍ける時に女のとふらひにおこせたりける返り
事によみてつかはしける

天彦のおとつれしとそ今は思ふわれか人かと身をたとる世に
○ワタシモ御聞及ノ通ノ仕合テ タウワク致シテワカ身テハナイ
カト存スル時節ニ カヤウニ御訪被下ル、 今テハモハヤ 天人
ノ御尋被下タヤウニサ存シマスル サテく御深切ナヨウコソ御
尋被下タレ

天彦とは、天上の人をいふ、物語ともに、これかれみえ『下三
』あたり、余材打聴、山彦とおなしとて、説きたれとかなは
ず、これはむかしより、誤りて、まきれたる事も有しにや、

集中貫之の長歌には、山彦の事を、天彦とよめり、但しかれ
は、もし後にふと誤りうつしたるにてもあらんか、そはいかに
まれ、こゝの哥は、山彦にはあらず、かれになすらへて、おも
ひ誤ることなかれ」

師云、「天彦」「山彦」けにさる事もあるへけれど、集中長哥古
今一〇〇二も「おとつれ」とつゞきて、「我か人かとたとる」など
いへる詞、「山彦」の縁語なり、又、「わか声せねはおとつれもせ
す」(拾遺・六四四)などいへり、されは此頃「山彦」「天彦」おな
しことにいひならへる『下二二五』やうなり、あなかに天人と

とかれしも、うけかたし、今、こゝろみにいは、

ワタシカ此節引籠テ居リマスレト誰モ訪ウテクレル人カ御座ラヌ
時節ニ御懇ニ御尋被下テワシカ身ノ不仕合ヲトモ、御歎キ被
下ル、御詞ヲワタシカ歎ク声ニ 天彦ノ音ツレシカト フト存シ
マスル ナセト申ニ 此節何モオモホレマシテ 我カ人カト思ヒ分
カネテ居リマスル時節故ニ左様ニ存シマシタ サテ、存シヨラ
ヌ御尋ニ預リ忝イ

知至私かに云、さきに天野政徳の御もとに此ことを申いてた
りしかは、こたへらるゝに、「山彦」は、菅家万葉に「フミモ「山
彦」と見ゆ、山霊をいふ、万葉に「山響」をよめり、「ひこ」とは
「ひゝき」の急語也、和訓栞に見ゆ、又、新六帖に「世の中にむ
なしき谷のひゝきをは誰山ひと名つけ初けん」(新六帖・五六

○)とも見ゆれば、「山彦」は、山中のひゝきなることしるへし、
されは、「天彦」もあまひゝきにて、声を高くあくれば何とな
く雲にもひゝきをいへるにや、ひたふるに天人と定んもいかゝ、
又、天人の御尋被下たやうといふもおたやかならず、

【守部云、新説、定てよろし】

【守部云、天ひゝきの説、甚然り、】

964、
うき世には門させりとも見えなくなとかわか身のいてかてに
する

○オレハ門ヲサシテ出入セヌヤウニモ見セヌニナセニワカ身ノ為ニ
ハウイ世ノ中テ得世ニ出ヌコトソイ」フミモ
師云、「見えなくに」を見セヌニとうつされしも、ことわりある
へけれど、又、ミエヌニともうつすへければ、

世ノ中ニハ門ヲサシコメテ アリトモ見エヌニ イカナレハワ
カ身ノ世ニ出ラレヌコトソ

世の交りもならぬ時なれば、うき世の中といへるなるへし、され
は、世の中に門をさして、わか身を出入させぬやうにも見えぬに、
いかなれば云々のこゝろならずや、

【守部云、「見えなくに」は、すなはち「見えぬに」の延たるものなり、】

977、
身をすてゝ行やしにけん思ふより外なるものはこゝろ也けり

○御恨御尤テコサル拙者モ何カト無抛コトトモニ取紛レテ乍存」
フミモ 久シウ心外ニ 御無沙汰ヲ致シタ 我身ナカラ心ニ思フ
ヤウニハナラヌモノテ御コルワイ 身ハワカ身ナレハトウナリト
ワカ心シタイニナルハツテコサルニ心ニ思フヤウニナラヌノハ
ワシカ心ハ身ヲハ捨テ置テ ヨソヘインテシマウテ心ト身トカ別
々ニ成タカシレマセヌ

下句は、心におもふより外なるものは、身也けりといふ意なる
を、さはいひかたきゆゑに、心なりけりといへるなり」

師云、訳の心に、おもふより外なるものは云々、又、さはいひか
たき故に云々もいかゝ、心得かたし、よりて」フミモ 例の、

私ハイツモ心ニハ御疎遠ニ存セヌカラニ 心ハイツモノ、御尋申
タト思居リマスレト カク仰下サル、ニ付テ考ヘテミレハ 如何
様イソカシイ身ノコト故ニ只心ハカリカ身ヲ捨置テ 御側ニ伺候
致シタカシレマセヌ心ハ身ニ付タル物故 身ヲ捨テ行ハツカナイ
ニ存ノ外ナルモノハ心テコサル

983、
わか庵は都の辰巳しかそすむ世を宇治山と人はいふなり

○ワカ庵室ハ 京カラ辰巳ノ方遠カラヌ宇治山ト云チャ 外ノ人
ハ此山ニ住テ見テモ 京カラ近イ故ヤツハリ世ノ_{下二四〇} ウイ
コトカ有テ トウモスマレヌ山チャト云チャカ拙僧ハ是レ此通り
ニサ年久シウ住テ居ル

余材、他人は、山の名を、宇治山と名つけてといへる、たかへり、打聴もわろし、さて都の辰巳としもいへるは、京の遠からぬよしにいへる詞なるに、むかしより其心を得たる人なしさる故に、此詞いたつらになり、又四の句をも、たしかにとき得ざるなり、四の句は、京ちかき故に、猶うきことのある山、といふ意にいひかけたるなり、

千秋云、訳にトウモスマレヌとある詞、よをうちとい_{下二四二}へる

詞の勢ひにあたり

師云、訳の「たつみ」の説、けにとき得られてをかしきもの_{ママ}から、又、例の、

ワカ庵室ハ京近キ辰巳ノ方宇治山ニ何ノ心モナク 只カ_{しか}斯_そウシテ住_す居_む
リマスルニ 何ソヤ世ノ中ヲ憂_ウシト思ヒテ通_ツレ住ムヤウニ 人ハ拙僧
カ住所ヲ宇治山ト申シマスル ドウテ世ヲノカ_{ママ}、ル位ナラ

「コンナ」京近イ所ニハ住ウカイ イツソ吉野ノ奥ニテモ住_ミマシ
ヨウニ_{如此}

宣長の訳のことくにては、とちめの句「人はいへとも」となくてはかなはず、

【守部いふ、新説味ひありてよし、】_{下二五三}

もかみ川のほれは下る稲舟のいなにはあらず此月はかり

○_上イヤテハナイカ此月中ハトウモナラヌ」

師云、訳の此月中ハトウモナラヌとうつされしはいかにそや、「はかり」といふ詞、古き哥には俚言に「ほと」といふ意なるか多く、まれには「のみ」といふ意なるもあり、よりておもふに、けさう人のはや逢ねと度々いへるにこたへて、是まで障りありて逢はぬか、全くないなどいふにはあらず、かならず此月はかりには逢ふへしといふ詞をふくめたるにあらずや、

常陸歌_{下二五二}

つくはねの此もかのものに蔭はあれと君か御蔭にますかけはなし
○ツクハ山ノアチラウラニモコチラウラニモ木ノ蔭ハオヒタ、シ
ウアレトモ 君ノ御蔭ニ マサツタ蔭ハナイ

つくはねのみねのもみち葉落つもりしるもしらぬもなへて悲しも
○此ツクハ山ノ紅葉ノチツテツモツタヲ見レハ惜ウ大事ニ思ハル
、カ テウト此モミチヲ思フトホリニ此常陸ノ国ノ百姓ハトレカ
レトヘタテナシニ コトくクフヒンニ思ハル、コトヨマア

さてしるもしらぬもなへてといふ詞は、上の句の、落葉のたとへのかたへは、あつからず、此所よくせ_{下二五五}すはまきれぬへし、扱此うた、何人のいかなる事をよめるにか、さたかならず、されは、結句の訳も、そのさす事によりてはかはるべきを、今しはらく、国司の郡内の民をあはれひたる事にとりて訳しつ、さるは京人の哥にても、其国につたはりぬるには、其国のうたとせる事は、万葉の東歌の中にも見えたり、余材わろし、打聴も、女の男をおもへることとせるは、いか、もし其意ならば、四の句、これもかれもとはいひもすべけれど、しるもしらぬもなへてとは、あまりひろうして、ひた_{下二五六}けたり」

知至ひそかにいふ、此二首の歌、一対に見る時は、訳を待たずして、君徳の下に及び、民心上を仰き悦ぶころ、詞にあらはれたり、これにこたふる次の歌のことは、下をあはれむ仁恵の心も亦しられたり、しかるを宣長次のうたにのみ眼をつけしか故に、ときなつみて、国司の歌ならんとはおもひながら、猶うたかひて、何人のいかなる事をよめるにか、さたかならず、結句の訳も、其さす事によりては、かはるべき云々など、たしかならず訳せるは、前後の哥並、心してつらねられたる撰者のむねをは、しり得ざるものなりけらし、

【守部云、知至かことうへなり、たゞし「落つもり」は今の俚言落着ていふかことし】 【下ニナセ】 【下ニナセ】

漢籍仏説にわたれる歌

故事をおなしうせるものは其一二首をあてなすらへてしるへし、

12 谷風にとくる氷のひまことに打いつる波や春のはつ花

礼記ニ立春之日東風解凍ヲ ○ 爾雅ニ云東風謂之谷風ト ○ 酉陽雜俎ニ云河陽黃魚池上水作花如纈ノ

146 子規なく声聞けば別にし故郷さへそ恋しかりける

148 おもひ出るときはの山の子規唐紅のふり出てそなく【下ニハセ】

荊楚歳時記ニ云杜鵑初鳴先聞者主トス 離別ト ○ 格物論ニ云杜鵑一名ハ子規三四月ノ間夜啼達且其声哀而吻有血漬草木初聞ハ則有別離之苦ニ或以為啼苦則自懸於樹ニ自呼ト謝豹思婦樂ト ○ 杜工部杜鵑行ニ云君不見往日蜀天子化為杜鵑

ト云云四月五月偏号呼ス其声哀痛流血ヲ

165 蓮葉のにこりにしまぬ心もて何かは露を玉とあさむく【下ニハセ】

法華経湧出品ニ云不染世間法ニ如蓮花ノ在水 ○ 大智度論ニ云謂細薄皮相ヲ云塵土不著身如蓮華葉ノ不受理水ヲ

173 秋風の吹にし日より久方の天の川原にたぬ日はなし

175 天の川もみちを橋にわたせはやたなはたつめの秋をしも待

詩云俌々彼雲漢為章干天ニ ○ 淮南子ニ烏鵲填河成橋度織女ヲ ○ 風俗通ニ織女七月当度河使鵲為橋 ○ 周処風土記ニ云七月七日其夜灑掃於庭露【下ニハセ】施几筵ヲ設ケ酒脯時果散ニ香粉於河鼓織女ニ註ニ云河鼓謂之牽牛ト

180 七夕にかしつる糸の打はへてとしのを長く恋やわたらん

荊楚歳時記ニ云七夕婦人以綵縷穿七孔針陳瓜果於庭中ニ以乞巧有蟪蛄子網於瓜上則以為得巧 ○ 西京雜記ニ賈佩蘭在宮時七月七日百子樓作樂樂畢以五色縷相霸謂慶庭ト

194 久かたの月の桂も秋は猶もみちすれはやてりまさるらん【下ニハセ】

酉陽雜俎ニ云月桂高百丈下有二人常斫之樹創随合 ○ 或云月中蟾桂地形也 ○ 来之間ノ詩桂子落月中ニ天香雲外ニ飄

207 秋風にはつかりかねそ聞ゆる誰か玉章をかけて来つらん

漢蘇武使匈奴匈奴留之詭言武死昭帝遣使教使者ニ

言天子射ニ上林中ニ得レ鴈ヲ足有レ繫ニ帛書ニ言武在ニ某ノ沢中ニ使
者如ニ其言ニ單于於レ是大驚キ乃放レテ武還【下三〇オ】

249 吹からに秋の草木のしほるれはうへ山風をあらしといふらん

嵐王篇ニ云大風 ○ 王鳳洲云山嵐ハ山氣也

255 おなし枝をわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはしめ也けれ

爾雅ニ云秋為ニ白蔵ト ○ 小爾雅ニ云秋ハ金行之時 ○ 字彙ニ白西
方ノ色 ○ 月令ニ立秋盛徳在レ金ニ

270 露なから折てかさゝん菊の花おいせぬ秋の久しかるへく

爾雅ニ云名ニ洛藹ニ或名ニ日精ニ一名ハ周盈【下三〇乙】 一名ハ伝公延
年有ニ紫茎ニ氣香シテ而味美者服之ヲ可ニ己疾延レ年ヲ

274 花見つゝ人まつ時はしろ妙の袖かとのみそあやまたれける

晋ノ陶潜九日無レ酒宅辺有ニ叢菊摘レ之盈レ把望ニ白衣人至ニヲ乃王
弘送レ酒酌而酔テ帰ル

291 霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦を織れはかつちる

白楽天詩ニ織レリ霜織ル露ニ秋錦 ○

大津皇子ノ詩ニ天紙風筆画ニ雲鶴ニヲ山機霜【下三三オ】 杼織ニル葉錦ニヲ

297 見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉はよるの錦なりけり

朱買臣ノ伝ニ云富貴不レ帰ニ故郷ニ如ニ衣レテ錦夜行ニ

340 雪ふりてとしの暮ぬる時にこそつひにもみちぬ松もみえけれ

論語ニ歳寒然後知ニ松柏之後【下三ハヲ凋ニ

522 行水に数かくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふなりけり

涅槃經ニ是身無レ常念々不住猶如ニ電光暴水幻炎ノ亦如ニ画レク水随
テ画ニ随テ合ニスル【下三ニ乙】

540 こゝろかへするものにもか片恋はくるしきものと人にしらせん

列子ニ云魯ノ公扈趙ノ齊嬰一人有レ疾同請ニ扁鵲ニ求レム治ヲ扁鵲謂ニテ
公扈ニ曰汝志強而氣弱シ故足ニ於謀ニ而寡レ断齊嬰志弱而氣強シ故
少ニ於慮ニ而傷ニ於專ニ若換ニハ汝之心ニ則均ニ於善ニ矣扁鵲遂剖レ
胸探レ心易テ而置レキ之投スルニ以ニ神藥ヲ既悟如レ初二人辞帰於レ是
公扈反ニ齊嬰之室ニ而有ニ其妻子ニ妻子不レ識齊嬰亦反ニ公扈之室ニ
【下三三オ】 而有ニ其妻子ニ妻子亦不レ識ニ室因テ相与求ニム弁ヲ於扁鵲ニ
扁鵲弁ニス其所ニヲ由訟乃已

556 つゝめとも袖にたまらぬしら玉は人をみぬめのなみたなりけり

法華經五百第子品ニ云以ニ無価宝珠ニ繫ニ其衣裡ニ去

765 忘れ草種とらましを逢ことのいとかくかたきものとしりせは

詩云焉得諼草言樹之背 ○ 毛云諼草令人忘憂背北堂也鄭云諼又
作【下三三乙】 萱 ○ 釈文ニ諼本作レ萱 ○ 説文作レ憲或作レ稊
顧夢麟云背レ南ニ向レ北ニ故謂ニ之背ト

833 ねてもみゆねてもみえけり大かたはうつせみの世そゆめには有ける

莊子^ニ夢飲^レ酒者且而哭泣^ス夢^ニ哭泣^{スル}者且^{ニシテ}而田獵^ス方^ニ其夢^ニ也^レ不^レ知^ニ其夢^ヲ也夢之中又占^ニ其夢^ヲ覺而後知^{ニル}其夢^ヲ也且有^{ニテ}大覺^ニ而後知^ニ此大夢^ヲ也○又云丘也與^レ汝皆夢也予謂^ニ汝^ニ夢^ト亦夢也[」]【下三三〇】

864 おもふとちまとみせる夜は唐錦たゝまくをしきものにそ有ける
左襄公三十一年^ニ有^ニ美錦^ヲ不^レ令^ニ人^ニ学^レ制^ニ焉

924 誰かために引てさらせる布なれや世をへてみれととる人もなし
李白廬山瀑布泉^ニ云掛流^ニ三百丈^ヲ○又飛雲岳^ニ素練^ニ

959 木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわか身はなりぬへらなり
載凱^ニ之^ニ竹譜^ニ云有^ニ名曰^ニ「竹」^ト不^レ剛^ニ不^レ柔^ニ非^ニ木^ニ非^ニ草^ニ云云竹之別類有^ニ六十一^ニ「」^ト【下三三二】焉

991 故郷は見しこともあらず斧の柄の朽し所そ恋しかりける
述異記^ニ云晋^ノ王質伐^レ木^ヲ到^ニ信安郡^ノ石室山^ニ見^{ニル}数童子^ノ圍^レ碁^ヲ与^ニ質^ニ一物如^ニ棗核^ノ食^レ之^ニ不^レ飢局未^レ終斧柯爛^ニ尽^ス既帰無^ニ復時人^ニ

996 わすられん時しのへとや浜千鳥ゆくへもしらぬ跡をとゝむる

淮南子^ニ昔蒼頡作^レ書而天雨^レ粟鬼夜哭^ス○黄帝^ノ臣蒼頡體^ニ卦画^ニ摸^ニ鳥跡^ニ引^ニ「」^ト【下三四〇】伸触^{レテ}類^ヲ而文字^ノ形立^ニ焉

998 あしたつのひとりおくれ鳴声は雲のうへまで聞えつかなん

詩云鶴鳴^{ニテ}于九臯^ニ声聞^ニ于天^ニ

1003 長哥

云々是をおもへは古の葉けかせるけたものゝ雲にほえけん心持して
神仙伝^ニ淮南王安愛^ニ道術^ヲ有^ニ八公^ノ詣^レ門皆鬚眉皓白授^ニ丹經^ヲ
三十六卷^ヲ後白日升^レ天^ニ臨^ニ去^ニ時^ニ藥器置^ニ于中庭^ニ鷄犬舐^レ之^ヲ
皆得^レ升^レ天[」]【下三四二】

此集俳諧歌と書る蓋伝写の誤ならん俳字にあらされは不叶なり

俳^ハ諧^ハ諷^ハ刺^ハ也○俳^ハ反^ハ諧^ハ反^ハ雜戲也漢書云談笑類^ニ俳倡^ニ○孔穎達云
宋^ノ大尉袁淑取^ニ古之文章^ニ令^ニ人笑^ニ者^上次而題^ニ之名曰^ニ「俳諧集」^ト○姚察云滑稽猶^ニ俳諧^ニ也[」]【下三五〇】

古今和歌集遠鏡補正下巻終 【下三五二】

- (いしかわ ゆうこ・本学大学院博士後期課程)
- (きむ よんちやん・本学大学院博士後期課程)
- (じょ げいしゅん・本学大学院博士後期課程)
- (もり さとこ・本学大学院博士後期課程)
- (ひだか あいこ・本学大学院博士後期課程)
- (したなか あつこ・本学大学院修士課程)
- (ふじさき ゆうじ・本学大学院修士課程)
- (よしだ さやか・本学大学院修士課程)